

Yesterday, when I  
was young



Pinokopapa



# 目次

こいぶみ 第二章 . . . . .	1
そして . . . . .	14
恋うる人	
あの人 . . . . .	19
鼻のシラノ . . . . .	23
こひぶみ . . . . .	26
てがみ . . . . .	27
返信 . . . . .	30
いまの想い . . . . .	31



## こいぶみ 第二章

この子は何故私にそんなことを聞いてきたのか、わからなかった。虎落とか虎落笛ってどんな意味ですか？ この子の後ろで、頬のこけた男がビクッと顔を上げる。二人とも国文学を専攻する学生だ。ところが私は法学部だ。俳句の季語にもあるよね、と答えてしまった。横の男が私を睨みつける。その一瞥だけで彼がこの子に好意を持っていることが察せられた。詳しいことは彼に聞けば、と言ってやっても良かったが、急に反抗心が巻き起こった。虎落と書いてもがりと読むわけだが、実は諸説あって、よくわかってないらしい、と話し始めてしまった。元々は魏の時代に虎落と言ったらしいけど、その意味も解明されてなくて、日本でも万葉の時代に人が亡くなると喪屋を作り、その周りを竹垣で囲って、そこに遺体を安置して遺族が喪に服するという葬儀の形式を取ったらしく、それをもがりと言ったようなんだよね。それで、その喪屋の周りを囲った竹垣を虎落と言い、その竹垣に風が吹き付けてひゅうひゅうと鳴る音を虎落笛と言ったようなんだけど、回りくどかったけどこれでいいかな？ 頬のこけた男が、一瞬悔しそうな顔をやる。へえ、じゃあ随分寂しい言葉なんですねと、この子が言う。葬儀の形式から来た言葉だから、寂しいよね。でも、物忌からくる形式で、遺族の悲しみをそっと囲っておいてあげようという意味もあるから、どうだろうね。そんな会話をしたのが、始まりだった。

大学闘争がもう学園闘争と呼ばれるようになって沈静化し、私たちも選択を迫られていた。

ちょっと前を自転車を押しながら歩いているかよ子がいた。声をかけてみる。振り向く顔が

そう、で、君はどうしたいの？ \newline

私は帰りたくない。仕送りを止められても帰らない。 \newline

暗い顔できっぱりと言った。

じゃあそう言えばいい。

そんな会話をしている後ろで声が出た。声はこの子の名前を呼んでいた。そこにこの子の両親が旅行鞆を持って立っていた。私はちょっと首がすくんだ。あまり関わりたくないシチュエーションだ。だが、この子は私の袖を掴んでいた。私はそれにも驚いてその手を見た。

ご両親？

そう聞くと、顔をこわばらせて頷く。

あっ、すみません、かなこさんの友人で、由紀と申します。

そう言っている横をお父さんが黙って通り抜け、先へ行ってしまった。

かな子、いきましょ

お母さんが言う。

じゃ、僕は、

と言うと、この子が小さな声で、お願い、と言った。後ろでお母さんがなぜか微笑んでいる。ひっ返せなかった。じゃ、と自転車は私が引き受けた。

この子の下宿はすぐ近くだったので、そう時間はかからなかった。その間、この子がじっと俯いて何かを固く思っているのが分かった。私がこの子の下宿を訪ねるのは初めてで、どこへ自転車を止めればいいのか、どこから入っていけばいいのか、迷ってしまった。ここ、とかよ子が指さす所へ自転車を止め、暗い廊下をついてゆく。お父さんはもうドアの前で立っていた。私を睨む。かよ子がドアを開けると

君は帰りなさい。

と怒号のような声が響いた。そりゃそうだ。私は部外者だ。ところが、かよ子が待って、この人も一緒に話させて。

と言う。

いいじゃない。一緒に話し合しましょうよ。

いやいや私は部外者だとそう思うさなか、お母さんがそう言い、手で、さあどうぞと促す。かよ子が目で、お願い、と見つめてくる。私は引っ張り込まれた。

君は誰だね。

お父さんが言う。

友人です。

ヘルメットを被った過激派かね。そうですと言いたかったが、普通の学生です。

と無難な答え方をした。

で、この子とはどういう関係なんだね。

問い詰められる。しらばっくれない思いだったが、本当に友人関係だったのだから、もう一度、

友人です。

と答えた。お父さんは腕組みをし、

本当は、この子とだけ話をしたかったのだが、娘があんたを頼りにしているみたいだから率直に言おう。先日、弘安警察が私の元に来て、娘のことを根掘り葉掘り聞いてきた。高校時代はどんな思想を持っていたのか、過激派との接触はなかったかとね。私も一応府会議員を務めさせてもらっているから、政治理念は一応持ってはいるが、昨今の過激思想には賛同できない。娘も一緒だと思っている。暴力革命はダメだ。ましてや公安警察に目をつけられるような騷をした覚えはないと追い返してやった。だが、デモの写真に娘が写っていたらしいので、家に連れて帰ってじっくり話を聞こうと思ってね。そんなデモに参加するぐらいなら、大学へやらせておくことはできない。私の秘書でもさせて勉強させた方がマシだ。

と私に向かって一気に捲し立てた。なんで私に言うのだろうと思いながら聞いていたのだが、いや！ とかな子さんが隣りで言う。以前、この子のお父さんは労働組合の書記を

して、労働争議の際は強硬な交渉を行ない、剛腕で知られていたらしい。それがあって革新系の府会議員を務めるようになったと聞いていた。

デモなら、私も参加したことがありますよ。だからと言ってすぐに過激派には結びつかないと思います。わたしだってどこかのセクトの人間じゃありませんが、この沸騰した状況じゃ、普通の学生でもデモぐらいには参加することもあります。それに、と、私はお父さんに殺し文句を吐くことにした。

かな子さんはお父さんの背中を見て育っていますから、今の腐敗した政治を追求するお父さんの正義感を受け継いで、同じ思いでデモにも参加してんだと思いますよ。かよ子さんはお父さんを尊敬していますから。

ウツと唸って、お父さんは言葉に詰まった。お母さんが続けた。

そうよ、だから言ったじゃない。

お父さんが私に尋ねた。

学部は？

法学部です。

そうか。

法学部なら潰しが効くからいいね。

何か、私が面接を受けている雰囲気だった。

いや、法学部といっても、私は経済社会史と憲法について勉強していて、ちょっと浮世離れしているんです。それに比べて、かよ子さんの学識は凄いです。本当によく勉強されていて、例えば清少納言ですが、高校の時、古文の先生だって、普通にセイショウ、ナゴンと呼びますが、かよ子さんはちゃあんと、セイ、ショウナゴンと言います。これが本当の呼び方なんですよ。ここまで分かっているなんてすごいと思いますよ。と捲し立てた。

この人は本当によく勉強しています。そのことは、僕が保証します。

そうかね。

そうですよ、お父さん。自分の娘を信じましょ。

お母さんが続ける。

こんな人が付いてるんですから、大丈夫。

ちょっと待って、どうして？ と戸惑うだけだった。

とにかく、娘さんとよく話し合ってください。僕は失礼しますから。

そう言って私は立ち上がった。

ありがとうございました。

と、お母さんが言ってくれた。解放された！ とほっとして、部屋を出た。かよ子も付いて出てきて、頭を下げ、小声で、迷惑だったでしょと言った。私は二、三度首を振り、軽く挨拶して帰った。

結局彼女は一週間ほど家に帰っていたらしい。学校の図書館に行くと、そこで出くわした。ちょっと待っててと言い、本を返却して彼女の方に向かった。

どうしてたの？

と聞く前に、顔が曇った。

父がどうしても帰れというの。口には出さないけど、どうも由紀さんのことを誤解し

てるみたい。

そうか……。困ったなあ。

困ってる？

困ってる！

彼女がふっと笑った。

ご飯、食べに行こう。

二人で学生会館の学食を食べに向かう。途中で、家に帰らされて母の監視のもと、家事手伝いをさせられ、父の鞆持ちもしたことなどを話してくれた。

そっか。でももう学校も正常化されてきたし、勉強する！ って言えば帰れるんじゃない？

そうなの。私、そう言って帰ってきた。

今日、今から予定ある？

部屋の片付けぐらいかな。

じゃ学食はやめて、街に繰り出そう。僕が奢る。バイト代が入ったから大丈夫。

彼女が笑った。私たちは街を横切る大きな川の袂の森永直営店に向かった。その店の床は板張り、昔の西部劇映画のように硬い足音が盛大に響いてちょっと苦手だったが、それでも店自体は好きだった。そしてこの店の橋を挟んで向かい側には小さなレコード屋さんがあり、二、三枚だが、マイルスデイビスやビル・エバンスのレコードも買ったりにしていた。そんな話を彼女としながら、ちょっと奢ったランチを食べ、食後にケーキとコーヒーを飲んでホッとしていると、この先の公園へ行こうという。いいよ、と立って、私たちはそちらに向かった。

少し暗い空になっていた。かよ子が回転遊具に腰掛けた。私がそれを少し早めに回すと、かよ子が怖がる。私は勢いをつけて回転遊具に飛び乗った。かよ子が暗い顔になっていた。

由紀さん、お願いがあるんだけど。

何？

私の友達で、とっても真面目な子なんだけど、一生懸命バイトをして学費と生活費を稼いでる子がいて、女の子なのに女の子らしい楽しみなんかと無縁な生活をしてる子がいるの。一度、その子とデートしてあげてくれないかしら。変な意味じゃなくて、由紀さんならその子に優しくしてあげられるのじゃないかと思うの。

ふん、じゃあ僕はやすらぎの森へのエスコートのピエロってこと？ それだけでいいなら、かもう回転遊具は止まっていた。なにか突拍子もない申し出だが、私は簡単に考えて引き受けてしまった。

下宿の電話にかよ子さんから電話が入った。何月何日、何時からなら、彼女、バイトの終わりに時間ができたと言ってたから、お願いします、とのことだった。そんなに働いてるの？、わかりました、と返事した。場所も聞いた。初めての人だから、服装と目印も確かめた。そして少しだけど、軍資金も用意した。私だって初対面の人とデートするなんて初めてだし、緊張もした。その日になって後悔もした。かよ子に会って、あなたも一緒に来るようにと頼もうかとも思った。だが、それも不甲斐ないと思い返して、初



デートの場所に向かった。約束の場所には30分前に着いてしまった。そこは地方都市のデパートの入り口だった。ただもうきまり悪くて、壁に持たれて俯いていた。その私の前に、息を切らせて飾り気のない質素な服装の女の子がやってきた。一目で約束の子だと分かった。彼女の方は私を見知っていたようだ。園子です、今日はよろしく願います、とお辞儀をしながら言った。私もそれに答え、まるでお見合いの後の初デートだと思った。

今の時間ですから、お腹が空いたでしょう。ちょっとだけ歩きましょうか。そう言って、すぐ近くの学生が行くには少し場違いなレストランへ向かった。私が大学入学祝いに親と初めて行ったところだ。その店の前に着くと、彼女が物おじするようには躊躇った。大丈夫、さっ、と手を取って中へ入った。彼女も硬くなりながら付いて入った。私はちょっと大人びた、気取ったことをしていた。予約の由紀ですと伝える。お待ち申しましたとウェイターが席に案内してくれた。彼女も黙って、ウェイターが引いてくれた席に座る。一度に緊張してしまったようだ。お料理はご予約通りでよろしいでしょうか。はい。そんな会話をじっと見ている。

ごめんね。もう料理は予約していたんだ。口に合わないかもしれないけど、僕の予算で決めさせてもらった。辛抱して。

・・・いえ、いいんです。

か細い声が返ってきた。

僕も頼まれた以上、あなたをやすらぎの森へいざなう執事の役目を果たさないといけないから、気にしないで。

しつじ？

そう、ナイトじゃなくて、執事。そうですよ、お嬢様。

ちょっと怪訝そうな顔をしたが、やっとなんか笑った。化粧っ気のない、飾らない笑顔だった。

この後は、映画でもどう？

それでいいです。

まるで絵に描いたようなデートコースだけど、勘弁ね。

そんな会話からやっとなんかデートが始まった。食事中も、できるだけ言葉を選んで、身の上話とか出身地とか家族のことは聞かなかった。ただ年齢は聞いた。

そっか、僕より一つ上なんだ。

へえ、そうなんですか。すると、私の方がお姉さん。

はい、お嬢様。

この返事にコロコロ笑った。可愛い人だ。

食事中、かよ子さんって可愛い人ですよ、と彼女が言った。

待って、彼女のことは今日はタブーですよ、今日はあなたが主役なんですから。

そういって、顔が曇る。食器が下げられ、コーヒーとデザートが来た。そうやって初めて、この人は綺麗に食べる人だと気が付いた。マナーとか作法といった次元ではない。全体に、若い子には似つかわしくない上品さがあった。使っていたフォークとナイフも、和食の作法のように音を立てずに置く。この人の手元をついじっとみてしまった。

荒れているでしょ。 \newline

いや、そうじゃなくて・・・。 \newline

あと、なんて言ったらいいかわからなくなった。

じゃあ、映画に行きましょう。

そういったものの、映画の最終回にはまだ時間があった。映画館に入ってもいいのだが、急遽私は途中のアクセサリー店に入った。そして、ろくに品定めもせず、半ば強引にネックレスを選んで、これがいい、と押し付けた。すると女性店員が、彼女さんですか、ならこれも一緒にどうですか、よく似合いますよ、と言ってくる。明日からの飯代どうしようと思いながら、買ってしまった。それをもらえませんかと押し返してくるが、買ってしまったのだからと押し付ける。彼女はそれを胸に抱くように受け取った。ああ俺はどうかしてる、顔には出さないが、そう後悔した。私はこの子に同情したのだろうか。

映画は女の子に合わせてラブストーリーを選んでおいた。手を取って館内の暗い階段を降りて

映画が終わった。場内が明るくなる。 \newline

すいません、私、眠ってしまったみたいで。 \newline

いいんです。僕の方こそ、なんか無理させたみたいで、申し訳なかったです。

本当にそう思った。

こんな朴念仁でがっかりしたでしょう。

そういっても、園子さんは首を横に振るだけだった。

この奇妙なデートも終わりかけていた。だがここで問題があった。バスがないのだ。映画館前を10時15分のバスがあるが、それが最終で、映画はそれを過ぎて終わる。私はそのことも考えていたので、自転車で来ていた。私はそのことを説明し、自転車で送ると伝えた。園子さんは躊躇っていたが、お願いしますと頭を下げた。二人でデパート前まで歩く。橋の上は風が通り、二人で歩くのが楽しかった。デパートの自転車置き場から自転車を引っ張り出し、後ろに乗るように促した。彼女は横座りに座った。私は二人乗りをしたことがなかったけれど、とにかく慎重に走った。田舎町は夜更けに人通りもない。と、二人乗りかい、焼けるねえ、と酔声が響いた。とにかく走った。そして、あっ、ここで、という園子さんの声で自転車を止め、ふうっと息を吐いた。

下宿ってどこ？

私は彼女が指差す方まで彼女を送った。農家の庭先の離れが彼女の下宿のようだった。

ありがとうございました。今度のことは、かよ子さんに無理を言って、私が頼んだんです。かよ子さんも何か悩んでいるみたいでしたし、・・・。

なんのことか分からない。でも、もうこれでお役目は終えたんだと思っていると、不意に、園子さんが私の首に手を回して抱きついてきた。えっ、と思ってどうしたらいいか分からなかった。そして散々迷って、そっと肩に手を回し、そっと抱きしめ返した。それしかしょうがないように思った。相当長い時間だった。園子さんが顔をあげ、体を離してきた。そして、ごめんなさい、と小さな声で謝った。

でも嬉しかったんです。ありがとうございました。かな子さんには言わないくださいね。

そう言って立ち去ろうとする園子さんに私は声をかけた。

すみません。僕はあなたともっと真剣に向き合うべきでした。すみませんでした。そう言うのを聞いて、園子さんは小走りに帰って行った。私はそんなことを言って良かったのだろうか。誠意を持って対していたけれど、真剣じゃなかったと告白しているようなものだ。ああ、やらかしたかなあ、と思いながら自転車で帰った。夜の底が抜けて星が降り注いでくるような夜道だった。

学校にも授業にもバイトにも、全部に気が抜けて力が入らない日々を過ごしてしまった。かよ子さんからも園子さんからも連絡はなかった。私は、そりゃそうだろうと思った。しかし、かよ子さんはなぜ園子さんを私に会わせたのか、そして園子さんはなぜ私とのデートをかよ子さんに頼んだのか、朴念仁の私には見当もつかなかった。とにかく何の連絡もないし、大学でも顔を合わさない。だが、こちらから出かけてゆくのは間違っていると思った。そんなことはしっちゃいけないと思い込んだ。そして、アルバイトに出かけたり、レポートに追われたりして何日か過ぎた。

その後 背に腹は変えられず、学生課のお知らせを覗き込み、臨時のバイトがあるのを発

重労働のバイトでしたね。 \newline

なんだ、みてたのか。 \newline

見ました。しっかり。 \newline

そっか、ちょっと金欠でね。割りのいいバイトだったから応募したんだ。 \newline

そうですね。金欠ですね。 \newline

とニコニコ笑う。

かよちゃんのせいだぞ。

そんなことないです。由紀さんのせいです！

そうだね、自業自得だ。

自業自得！

そう言い返して笑う。私の悪戯を見つけて得意になっているように思えた。ちょっと首がすくむ。それを誤魔化すように、じゃ、ご飯に行くか？ バイト代もたんまり入ったし、と言ってしまった。はい、奢ってください、とニコニコして言う。じゃあ、ちょっと待ってて。着替えてくるから、という、ついていきますと言う。逃げられたらいけないからとも。見透かされているようで、ますます首がすくむ。高台にある私の下宿に着いて、ちょっと待っててと玄関口で言っても、かよ子がついてきた。着替えるんだからここで待ってて。そういっても部屋に入ってくる。へえ、案外綺麗にしてるんですね。だから、外で待っててと追い出す。そして着替えたのだが、自分でも汗臭いのが分かった。急ぎ、共同炊事場まで行き、タオルを絞って部屋に帰ると、かよ子が部屋に入り込んでいた。

もう、ダメだよ、ここは男一人の部屋なんだから。 \newline

何がですか。 \newline

だから！ \newline

そう言ってかよ子の背中を押す。追い出して、大急ぎで体を拭いた。そして着替えて外に出ると、ハンドバッグをぶらぶらさせながら、かよ子は待っていた。

よく見ると、今日はおめかししてるんだ。

そうですよ。

とふくれる。そんな姿を初めて見た。

さ、行こう。・・・、じゃ、ポケナスだな。

どこですか。

カツ丼の美味しい喫茶店。

安くてボリューム満点。

はい、そこでいいです。

バイト代はそれでも半分消えてゆく。

大学の近くの喫茶店だから歩こうというと、いやです、自転車に載せてください

という。

じゃ、坂の下からな。

下宿は急な坂の上にある。だから二人乗りの自転車では危ないのだ。私はかよ子が訪ねて来るような気はしていた。だが、そうだったらどうしようと思っていた。別にやましいこともなし、かよ子に言い訳しなければならないこともなし。そうは思っても、訪ねてくれば厄介だとも思う。何か追い詰められたような気になってしまっていた。

さっ、後ろに乗って。 \newline

そう言って、自転車に跨った。まだ舗装してない道はお尻が痛くなる。かよ子は彼女も横座りに座って、私のベルトの辺りに抱えつく。私はというと、誰とも会いませんようにと祈りながら、ペダルを踏む。

また汗をかいた。ポケナスの入り口を押し開くと、聞き慣れたカウベルが響く。席は空いていた。二人は黙って向かい合わせに座り、お水を待つ。そして、カツ丼二つと頼んだ。この店の通りを挟んで反対側には、昔、芥川賞候補にもなったことのある大学の遠い先輩のやってる古本屋があった。そこで私は芥川の手簡集を見つけ、買った。ふうん、渋いねえ、と言われた。そのことを話すとかよ子が感心する。当たり障りのない話をし、肝心なことを避けているようなものだ。しかし、それをどう話せばいい？ 疑問もあった。彼女たちの方に何か特別な事情もあるように思える。カツ丼を食べながら、今更だがそう気付く。まっいいか、夕飯を食べればこの子を送って今日は終わりだと思った。だがそうではなかった。

園子さん、とっても喜んでました。由紀さんってとってもいい人ですねって。

たわいもない話で終わりそうな気がした。それでいいと思いながら、私は頷いた。初めてですね、由紀さんが女の子連れて来るのは、とポケナスのお姉さん。彼女さんですか？ はい、彼女です。かよ子が得意そうに言う。いやいや、ご学友ですと私は慌てて否定する。照れなくていいですよ、とお姉さんが笑って向こうへ行った。

園子さんのことは、ここでは話せません。あとで話させてください。 \newline

とかよ子が小声で言った。ただもう頷くしかなかった。

食事が終わって、送ろうかと言ったが、かよ子は首を横に振る。帰るところがないんです、と言って自転車の後ろに座った。

今晚止めてください。 \newline

えっ！ \newline

としか声が出なかった。

私、下宿を引き払ったんです。で、荷物を全部送り出したら、手伝ってくれてた園子さんも磯崎先輩も都合が悪くて泊められないって言われて、彼のところに行きなって磯崎先輩が。

磯崎さんは私の部屋に飾ってある未完成の大きな油絵の作者だ。私がバリケード封鎖された学舎から勝手に担いで持ってきたものだ。それをある日磯崎先輩が訪ねてきて、あ、ここにある！と怒られた。でもいいわ、出来が悪いから、あなたにあげる。でも、貸しだからね、と笑った。この人は噂のある人で、高校生の中からヤクザの情婦をしていて、そのヤクザにお金を出してもらって大学に通っていると言われていた。本当か？私はそんなことを言う男の顔をまじまじと見た記憶がある。しかしそんな彼女とかよ子がどこでどうやって知り合ったかは知らない。

本当に行くところないの？ \newline

明日は引っ越し先に荷物が届くし、そっちでちゃあんと生活できるから、お願いします

男に頼るなよ。 \newline

誤解されるぜ。 \newline

誤解ならされています。先輩やら園子さん、その他大勢。 \newline

よしわかった。僕の方がなんとかする。 \newline

そう言って私はかよ子を自転車に乗せ、下宿に帰った。そして、ここで待ってと、下宿の赤電話に行き、下田先輩、赤松、戸田、と電話できるところは全部かけた。しかし、下田先輩以外電話には出ず、仕方なく先輩に、今夜止めてくれませんかと縷々話したが、今日は彼女が来てるんだってなんだ！そう憤慨していると、大家のおばさんが出てきて、どうしたの、なんか女の子を泊めなくちゃならないって聞こえたけどと言う。そうなんですよ、と大嘘をつく事にした。妹がいきなりやってきて、泊めろって言うもんですから、寝具もないし、僕がどこかへ行こうと思って、と言った。すると、お布団なら貸してあげると言い出した。そしてお風呂もどうぞとってくれた。私はグッと何かを飲み込んで、ありがとうございますと礼をいい、寝具上下を借りて、部屋に戻った。かよ子は疲れたのか、壁に持たれてうとうとしていた。私は押入れの中からTシャツとジャージの下を出し、それをかよ子に押しつけ、お風呂に入りなさいと洗面用具と寝巻き代わりを持たせ、浴室へ案内した。

かよ子がお風呂に入っている間に一計を案じた。私はさして荷物も入っていない押入れの上の段の荷物を放り出し、そちらに私の布団、部屋の真ん中にかよ子の布団を敷いた。その作業が終わった頃、かよ子が髪を拭きながら部屋に入ってきた。そして私のしていることを見て、ええ！どうするんですか？と声をあげる。僕がこっちで襖を閉めて寝るんだよ、と言うと、布団の上にペタリと座り、まっ、いいですとつまらなそうに言う。小柄なかよ子にTシャツは似合わなかった。

私が風呂から出ると、大家のおばさんが、可愛い妹さんですね、と言ってきた。あい

つは母親似なんですと誤魔化す。私はそう言いながら、自分の部屋に帰るのに怖気ついていた。とにかく帰ろう、そう思っておばさんに礼を言い、タオルを首に巻き、から威張りで帰った。すると、かよ子が居ない。キョロキョロと部屋を見渡し、押し入れの襖を開けてみた。かよ子がもう寝ていた。小さな体が寝息を立てている。私はそっとかよ子の髪を撫で、襖を閉めた。ああ、なんて日なんだと思った。そしてホッとしていた。

私も疲れていたのか、それともほっとしたからか、寝つきは悪くなかった。押し入れのか

朝起きると、かよ子が一緒に寝ていた。実は私も寝ぼけていた。何かさらさらと髪が触

二人共目を覚まし、かよ子がきゃっと小さく悲鳴を上げたり、私がそれに驚いて布団か

もういいですよ。 \newline

そう言われ、押し入れから降りる。かよ子は髪こそボサボサだが、昨日と違った服を着ていた。私はそれを横目で見ながら、自分の服を回収し、また押し入れに戻る。そして、手早く着替え、押し入れから出るとかよ子は髪を梳いていた。ちょっと待ってて、と私は共同炊事場へ行った。そこで顔を洗い、自分の食糧庫からりんごと食パン二切れをだし、パンはトースタに、りんごは皮を剥いてカットして皿に盛ってフォークを置き、コーヒーを淹れて部屋に帰った。佳代子の臉が腫れぼったく見えた。小机に朝ご飯を置き、向かい合わせに座る。かよ子は俯いたままだ。何か頬の辺りに涙の跡が見えた。食べて、と勧め、コーヒーを口に含む。変わり映えしないインスタントの味だ。

今日、まだいていいですか？ \newline

と聞いてくる。

引越し先に荷物が届くのが午後なんです。だからまだお部屋にも入れないし……。

僕は講義があるから学校に行くけど、いてくれていいよ。 \newline

だめ！一緒にいてください。 \newline

そうか、まっ、いいか。この講義、休んだことないから大丈夫だと思うし。

何かわからないが、ひどく切迫した思いをかよ子から感じた。

貧しいけど、朝ごはん、食べて。

私たち、なんか、一緒にご飯ばかり食べてますね。

そう言っとかよ子が笑う。

園子が由紀さんって、とってもいい人って言ってました。私、知ってたんです。園子も由紀さんのこと、好きなんだって。だから、……。

このかよ子の話に、私は固まっていた。

だから、私がいなくなっても、由紀さん、園子と付き合ってくれたらいいなって思ったんです。園子さんは可愛くて真面目な子ですから。

えっ、かよ子さん、いなくなるの？ \newline

かもしれませぬ。 \newline

重い沈黙があった。

園子さんに、由紀さんの勉強してること、話してあげたんでしょ？ 私にも話して。デートの最中にそんな話をするのはどうかと私自身は思ったのだが、園子さんがどうしても言うので、法学と経済学のさわりをちょっと話した。産業革命の後、アダム・スミスによってやっと経済学が成立した。それは資本主義の社会経済体制になったからだ。そして、僕は人々の生産するものが商品と認識されるようになったと言うことだと思っている。さて、その商品は貨幣を持って売買される。その貨幣の価値を裏付けるのは国家だ。国家と商品と貨幣、これが明確な形を持って出現したのが、産業革命以後ということになる。

国家論はヘーゲルやマルクスだけでなく、その以前から論じられているけど、倫理学だの正義論だの論じられていて、経済体制としての国家は、この産業革命以後になって成立したものだ。マル系の学者たちは論じる。階級国家論だの、ブルジョワ革命だのがある。そのあとプロレタリア革命が起こる。革命の主体はこの疎外されたプロレタリアートであって、それゆえ、プロレタリアート独裁は必然である。プロレタリア革命も必然である。そんな論旨の通らない話を、この前は園子さんに、そして今はかよ子に私はしている。何か喋ってなければ、何か壊れると言った思いに潰されそうだった。簡素な朝をたべおわったかよ子が私の横にくつつくように座り、頭をもたせながら私の話を聞いた。園子さんの時と同じように、私は頬にかよ子の髪が触るのを感じていた。右手にかよ子の暖かさも感じた。だから余計に、だけど資本主義はその以前の封建時代もそれ以前も最初からあったと思う。資本主義は人間の欲望とその集合だからだ。国家はそうはいかない。などと喋っている私の言葉を、かよ子は聞いていただろうか。私は一冊の本を取り出した。共同幻想論である。このなんとも難解な観念を振り撒く本は、理解しがたく読んでもわからない。ちょっと意識の高いやつはこれをバイブルのように言うけれど、この剛腕の評論家は手強すぎた。だから放り出した。本こそ本棚にあるが、著者に対する当てつけに、いつか放ってやろうと本棚に置いてある。見せてとかよ子が言う。本を渡すと、二、三ページ読んで、私にくださいと言った。

いいよ、そんなんでよければあげる。 \newline

由紀さん読んだんですね。 \newline

と言うので、3回ぐらい読んだ、でもわからなかった、と答えた。かよ子もその本を胸に抱くように持った。何かが終わったと、私にも分かった。かよ子が本を横に置き、私の方に向き直って、そっと顔を近づけてきて私にキスをした。かよ子の唇が私の唇に触れた。

由紀さんって本当にいい人ですよ。そう言って離れ、帰ります、とまるで宣言するよ

私はかよ子を送って行った。ただ黙って二人で歩いた。バス停で待つと、すぐに駅へゆ

かよ子はその足で駅に行き、県外の磯崎先輩の家に行ったらしい。三日して夕方大学か

いや本当に何もしてません。 \newline

そう答えるしかなかった。

何もしてない？ 本当に何もしなかったのか？ えっ、何もしなかったって？

疑問符ばかりが飛んでくる。

・・・そのう、つまり男と女のこと、つまりだ、抱いてやらなかったってことか！！  
頷くしかなかった。

お前は何者だ！ 与謝野鉄幹か。この朴念仁。女にあれだけのことをさせておいて、柔  
肌に触れもしないで、道でも説いたか。

頷く。べたんと先輩は座り込んだ。

なんて奴だ。あれは最後の機会だったんだ。あいつは休学届を出して、実家に帰った。い  
や、帰らされたんだ。そのため、下宿を引き払うと言うから、みんなでお前のところ  
に行かせたんじゃないか。なんで抱いてやらなかった。重荷になるとでも思ったのか。そ  
れともかよ子が嫌いだったとか。

私は首を横に振るしかなかった。

あの子はピュアすぎる。大事で大事で仕方なかった。だから、男と女の獣ごっこはどう  
してもできなかった。

何言ってんだ。女は抱かれなきゃ、愛を確信できないんだよ。あいつはお前に抱いて欲

僕はそんな大した男じゃないですよ。 \newline

そうだ、お前なんかそこら辺の小僧っ子より大したもんじゃない。でもな、かよ子には

でも、僕にはできなかった。 \newline

そう言えばお前、ずうっとあいつを抱きしめてやってたんだってな。 \newline

はい。 \newline

そうか・・・。 \newline

磯崎先輩は何か一人で合点していた。私は黙っているしかなかった。

お前は変に女に安心感を抱かせる男だから。いつも眉をしかめ、世の中の悩みを全部引  
き受けていますと言った顔付きをしてるかと思ったら、口を開くとさわやかで出しゃば  
らない明るさがあって、清潔感がある。育ちの良さか？ 罪だよ、それは。それに、女に  
優しい。優しすぎる。私にはちょっと肌に合わないけどね。

僕はそんなつもりはないんですけど。 \newline

わかった。かよ子も、もう泣いてなかったし、お前のことも諦められただろう。女は強

私が頷くと、磯崎先輩は立ち上がり、帰って行った。審問官は帰った。





そして

その日からいつの間にか、私は一人になっていた。日常は変わらない。バイト先も変わらない。だが私は誰とも話さず、一人で飯を食って、声を出して話すのはゼミの発表だけ。卒論も考えねばならず、だが、周りに誰もいない、もう終わりが来てしまったような毎日だった。

夏も実家には帰らなかった。そんな時、学生会館のテレビが大音量で何かを報じていた。防衛庁のバルコニーであの右翼作家が軍服を着て、自衛隊の前で演説をしていた。それは録画だったようで、アナウンサーが

この後、割腹自殺したようです。

と叫んでいた。彼は東大全共闘の前で、天皇陛下万歳と言ってくれれば、君達と共に戦おうと言った。それに対しての学生たちの答えは

ナンセンス

の連呼。私はその言い方こそナンセンスで下らなくて馬鹿のひとつおぼえかと恥じた。彼はマイクも使わず、整列した自衛隊員に憲法改正を訴えていた。そこでもやはり野次と怒号が飛んだ。そして私は、野次り罵っても自衛隊員が隊列を崩さないことに驚愕していた。

そして翌年、もう一人の文学者が死んだ。彼は、この大学にも講演に来てくれた。その講演会の前宣伝の集会で私が取り上げたのが、暗殺の哲学だった。この徹底した思索者は、自己否定と言う最も強烈な自己主張という反語じみた思索を述べている。しかし、彼は病の進行が進むと、母親に言われるまま踊る宗教の集会で、皆と一緒に踊った。だからって、それがどうした！しかし、三島はその死に様と共に古典になり、高橋和巳は、もう忘れられた。45歳と39歳だった。そして体制を批判、攻撃した思想家、吉本隆明は転向した。

私は思わぬところでかよ子の消息を聞くことになる。この大学の学園闘争の間中、それを指揮し、まとめ上げてきたセクトの学生が隣県の大学で地下組織を作ろうと潜入し、内ゲバで叩きのめされ、あげく逮捕された。その活動家学生についてまわっていた学生が、学生会館のロビーで知った顔を見つけては声をかけ、保釈金が200万だ、カンパして、と言って回っていた。

かよ子さんは一人で\rensuji{60}万出した。だからみんな頼む！ \newline

かよ子は隣県で必死にバイトをし、その金を作ったらしい。私はその捕まった活動家が結核に罹患しているとしていたので近寄らなかった。しかしカンパは別だ。なけなしの2万を差し出した。それはかよ子のためでもあった。私にはもう何もできない。そう

思って、金を出した。しかし保釈金は集まらず、彼は医療刑務所で咯血して死去したとか。かよ子も同様に罹患して、結局親元に連れ帰られたと聞いた。そうと聞いても私は聞いているだけだった。そして私は大学を卒業し、世の片隅で小市民を生きている。



恋うる人



## あの人

その人が不意に私に声をかけてきた。振り返ると途端に私は身構えてしまった。少しやつれたみたいとも思った。私が入学したての時、部室を訪れるとこの人が一人座っていた。

入部希望ですが。 \newline

と声をかけると、驚いたように振り返り、あっ、ちょっと待ってくださいと小さなカバ

由紀くん、久しぶりです。 \newline

髪型は変わっていなかった。だが肌はくすみ、一気に老けた？ ように見えた。

ちょっと話さない？

いいですよ。

とだけ答えた。先輩だから敬語になる。この人はすぐ横のカフェに入った。そして、窓際の席に座り、

私、東京に行きます。新宿にある出版社に就職が決まったの。そこで編集者になるの。と言う。責められるのかと思っていたが、普通の話だった。

凄いですね。希望が叶いましたね。

何を言っているのかわからない。でもこの人は平気なのだろうか。私はこの人に対して、けものになったのだ。かよ子のことがあり、後日、磯崎先輩に会った時、私は思いっきり引っ叩かれた。かよ子が親元に帰った後のことだ。磯崎先輩はわざわざ私の下宿を襲い、お前わかってるんだろうな、と言いながら平手打ちされた。それぐらいのことはやってのける人だ。先輩の手が私の顎を掠め、私は一瞬フラッと倒れそうになった。

かよ子のことは知ってるな。あいつがこれ以上不幸になったり、結核で死んだりしたら私は頭がフラフラして座り込んだ。耳もとで石崎先輩の声が響く。

すいません、軽く脳震盪を起こしたみたいで。

えっ、と言いながら先輩は部屋に上がり、私の脇に手を入れて部屋の中へ引きずっていった。私はそっと横になって先輩を見た。

すごいですね。 \newline

そう言って私は目をつぶった。たぶん、30分から1時間、寝てしまっていたらしい。意識はあった。だから、寝てたんじゃなくて、目をつぶっていたということだけだったと思う。しかし初めてのことだった。それから目を開くと、先輩が私を見てた。私は何も思わず、先輩の腕に手を伸ばし、この人の胸に顔を押し当てた。何するんだよ！ と叱責の

声が出たが、私の嗚咽を聞くと、頭を抱きしめてくれた。少しの間だった。先輩は黙って帰った。そんなことがあった後は、もうかよ子のことは聞こえて来なかった。闘争のことも、昨日のことになっていった。

由紀くんも来年卒業でしょ。就活してるの？

はい、大阪の銀行2行から来ないかとは言われているんですが、大学院に行きたいとも考えていて、10月に試験と面接があるので、それを目指して勉強はしているんですけど……。

へえ、そうなんだ。でも、そちらの方がお似合いね。以前、由紀くんのお部屋にお邪魔した

いやよく覚えてましたね。 \newline

と言いながら、冷や汗だらけになってきた。あの時、私はそんな話をしながら女の人が来訪した時は必ず部屋の扉か窓を開けておくのだが、私はそっとそれを閉めた。私の中でけものが動いた。私だってけものになれる。この人を恋る心は本当だ。この人を自分の思うままにする！ 後先なんてどうでもいい、恋するものがその人との愛を完成させるのに男と女の獣ごっこが必要なら、私もけものになってやる。そう思って、壁際にもたれているこの人の横に座った。この人は私の話を聞きながら、そっと俯いている。何を考えているのだろうか？ 私を安心な男と思っているのだろうか。肩に手を回そうか。顔を挟んで、こっちに向けさせようか。私にはどっちもできなかった。そしてぼそっと、キスしていいですかと聞いてしまった。答えはない。でも立ち上がらない。体を振って顔を近づけ、そっと口づけをしてしまった。この人はじっとしている。顔を離し、抱きしめてもいいですかと聞いた。ああ俺は何をしているんだ！ あの子を抱きしめて、その体の小ささと丸み、暖かさをじっと守っていたじゃないか。あの子を失って、……。いや自分から手放して、いま、私は自分の所業をやり直すために無関係な人を巻き込もうとしている。恥じた。しかしこの人はかすかに頷き、私の首に腕を絡めてくる。私のリビドーが発動した。背中にまで手を伸ばし、両腕できつく抱きしめた。あとは原初のままに行動するまでだ。上着の白いボタンを外す。背中のブラのホックの外す。これでいいの。手が動く。この人は抵抗しない。ふっと、乳房の丸みと乳首が現れた。白い陶器のような肌が手に吸い付く。唇で触れてみようかと迷う。この人が私の顔を抱き寄せ、胸に押し付けてきた。なんで？ どうしろというのだ。乳房に顔を埋めて戸惑うばかりだ。しかし、理性なんか吹っ飛んでいた。上着を剥ぎ取り、スカートも脱がし、下着まで押し下げ……。けものは優しさを忘れた。この人の体を蹂躪し、唇を吸い、けものごっこにのめり込む。そっとこの人の体を抱きしめ、恋した人を抱きしめるとこんなにも喜びがあるのだと知った。この人の腕も私を抱擁する。一つになろうと思った。待って、赤ちゃんができないようにしてと言う。不器用なものを外し、避妊具をつけ、また一つになる。目を瞑り、半ば苦悩するように顔を歪める。

いいの？ 私はこの前、二人の男に汚された。遊びにこいというので行ってみると友達と分からない。何を言ってるのか分からない。この人は3ヶ月前、精神科の病院に入院していた。私はそれを知り、見舞いに行った。すると、こわばった顔で運動場の端からやってきて、もう少しで退院すると言った。この人を呼びに行ってくれた看護婦も、お兄さん



ですか？ と言っていた。多分私をこの人の兄か何かと思い、気軽に面会させてくれたのだろう。そして、今もそれなりのお薬を常用していて躁鬱の大きな波に乗せられ、尋常な精神状態ではないのだろう。私は何をいえばいいのか？ 私はもう続けられなかった。

やめよう。 \newline

この人が言う。言葉がない。何を伝えたらいいのかわからない。

みんな、私を傷つけて行ってしまおう。

私も傷つけた。私が一番したくないことを、今している。なんて滑稽な姿だ。これが私のやったことか。

でも、由紀くんは優しくかった。こんなことになるとは思っていなかったけど、私、由紀  
そう言われて私は顔くしかなかった。この人は向こうに向き、服装を整え、向き直った。  
その間に私も身を整えた。この人がハンカチを出し、微笑みながら私の唇を拭いた。口  
紅がついていたらしい。そして、

私、また来るかもしれない。 \newline

そう言って部屋を出て行った。それから私はこの人を見ていない。

喫茶店で、私は何から話せばいいのかわからないまま、この人を見ていた。すると、手  
を出せと言う。テーブルの上に手を乗せると、私の左手の指からファッションリングを  
抜き取り、自分の指に嵌めた。男の指に入っていたものだから、この人の指には大きすぎ  
る。クルクル回った。

もらってもいい？ \newline

と訊く。

安もんです。僕も人にもらったものですけどいいですよ。

そう言って、指輪を抜き取り、太さを調節して嵌め直した。シルバーの小さなダイヤを  
埋め込んだファッションリングだった。

誰か、お付き合いしている人からもらったんじゃない？ だって、あんなもの、持ってる  
あんなもの？ 私はいっぺんに顔に血がのぼった。

いや、彼女なんかいません。それと、あれは・・・、  
と言い淀んでいると、

聞かない。でも、聞きたい。でも聞かない。

そういつて横に向いた。俯くしかなかった。あれは、かよ子が家に帰る前、そのことで  
乗り込んできた磯崎先輩が、もし、かよ子がもう一度ここにきたら、今度こそ抱いてや  
れと、置いて行ったものだ。それを、私はこの人に使った。どちらも裏切った。ゲスの  
極みだ。

東京にはいつ行くんですか。 \newline

1週間先。今日はそのためのお買い物。もうすぐ兄が迎えにきてくれるの。ほんとはね  
そう言って笑った。

そろそろ時間だから。この人が席を立つ。足元の大きな荷物を持って行こうとするのを、

私が引き受けた。そしてレジで支払いを済ませ、この人についてゆく。街角で、待ち合わせはここ、という。私はどうしたらいいのだろう。そう思っていると、荷物を持った方の腕をこの人が抱え、ありがとう、兄が怒るから、ここでさよならします、と言った。あの美しい胸の丸みを感じられた。

ありがとう。 \newline

これがこの人の最後の言葉だった。そして私は鼻のシラノになった。

## 鼻のシラノ

あの人が去ったであろう日が過ぎて以来、私はあの人ことは聞くことがなかった。だが十年、いや、もっと経って、もう一度あの人声を聞くこととなった。電話の主が女であったことで不機嫌になった妻が、\*\*さんって人から電話と受話器を渡してきた。名前では、私は急には思い出せなかった。しかし声を聞くと、

お久しぶりです。 \newline

と、通り一遍の挨拶をするくらいの世間知はもう身につけている。

お元気ですか。

考えてみると、この人は私が初恋をした人に似ていたことに改めて気がつく。

いまどちらですか。

あれから二年で、東京から帰ってきたの。

声が少し年取っている。このあと、色々な友人の近況を話しだす。何を私と話したいのか、わからない。

\*\*さんはB型肝炎で困っているって言ってた。コンパの時、盃のやりとりしたことがこの人はこんなに薄っぺらい感じの人だったのか？ 私はこの人の口から次から次へと世間話が出てくるとは思っていなかった。

ところで、由紀くんはいま、何してるの？ \newline

高校の教員です。 \newline

へえ、大学で教職課程を取ってたの？ \newline

いや、修士教員で、修士課程を終えた特別枠で教師をやってます。 \newline

そうなんだ。やっぱり大学院、いったんだ。 \newline

はい。思ったところへは入れませんでした。やっとなんか引かかったところがあった。で

いいね。なんか、穏やかで確実な生活みたいで。・・・、あのあと、ほんとは由紀くん黙って聞いているしかなかった。台所で妻の包丁を使う音が聞こえる。

お願いがあるの。お手紙ちょうだい。一回だけ。

そして小さな声で、

私、由紀くんの指輪、今でも持ってる。

と言った。

いいですよ。住所、教えてください。

この人が言った住所に聞き覚えがあった。それを紙に書き取る。

長いこと話してごめんなさいね。奥さんによろしく。

それで電話は切れた。手に汗を握っていた。

電話、終わった？ ご飯よ。

聞いてたんだ。

だれ？

大学の先輩。

何の話？

さあ。なんか、懐かしくてかけてきたんじゃない？ 同じクラブだった人の噂をいろいろ話してくれたよ。長崎の市長の孫だった先輩のこととか、九州電力の原発研究所に入った奴や、倉敷の市役所職員になってるやつ、それとこいつを在日の恋人から奪った女のこと、

えっ！ そんなことがあったの？ \newline

あった。育ちの良さそうな男だったけど、卒業間近になって親のコネで市の職員になる

そうだった。あの人に合わせて、そう言われて私はクラブのコンパに連れて行った。すると、三宅と言ったが、その男が逃げ込んだ女から私は猛烈に攻撃された。ろくにクラブの運営に協力せず、学業もおろそかにして、碌な作品も書かず、何、あれは？ 芥川を気取った鼻につくようなつまらないものを書いてトクトクとしてと、人も無げな罵詈雑言を浴びせられた。私は歪んだ顔と毒を吐き続けるくちびるを醜いを見て、言い返しもしなかった。周りはそれをぼかんと見るばかりだ。三宅はじっと下を見て顔も上げない。そんな修羅場があった。私は黙って帰った。彼女が私について帰ってきたことにも気が付かず、私は大学のグラウンドを突っ切って下宿に向かった。そしてそこまで来て、やっと彼女に気がついた。ごめんなさい、そう声をかけられ、足を止めた。彼女は私のすぐ後ろにいた。私は地面にどかんと座り込んだ。彼女も私の横に座った。それから、私のせいで嫌な思いをさせてしまって、ごめんなさいと謝ってきた。私は大いに怒っていた。秋風が吹く。もう夏の名残りを攫っていく。彼女が私の太ももに頭を乗せ、膝枕をして私を見上げた。秋風が私に冷静さを取り戻させた。この子になんと言って慰めたらいいのか、分からなかった。

いいんだ、僕の話は。しかし、ちゃあんとエスコートできず、ごめん。 \newline

そう言って、この子の髪を撫でた。幼い子のようにこの子は泣いた。私はそっとそのまま空の飛行機の飛ぶ様を見ていた。そして、送る、と言ってこの子を起こし、立たせた。この子の体がゆらゆらと揺れる。両手で肩を掴み、大丈夫、大丈夫、そう言って私はこの子に背を向け、おんぶしてやる、と言った。彼女は黙って私に負われた。体格のいい子だったから存外に重かった。しかし男だ、頑張った。彼女はまだ泣いていた。そんなことがあったんだ。

この人の電話でこんな話まで思い出した。その話も妻に話した。三宅の内幕は、それを聞いたらしいあの人と話してくれた。だから三宅はあの悪態をついた女に捕まったまんま、結婚までして子供も成しているそうだ。私はそんなことを思い出しながら、首を横に振った。三宅がいま幸せかどうかなんて、わかりゃしない、そう思った。そしてあの方は花のように美しい時を過ぎて、一度も花を咲かせぬまま、一人だとも思った。手

紙？ それでいいならいくらでも書こう。私は鼻のシラノだ。何一つ成さぬまま生きて、言葉だけ連ねている鼻のシラノだ。あのマイヨールの地中海の美しさをあの人に見たのだから、私は手紙を書いて送ることなどなさねばならないことだろう。そう思った。

## こひぶみ

あの虫も殺さぬような顔をして恋人を犠牲にした男の名前を明かしたのだから、この人の名前も明かしましょう。寿子さんと言いました。私は寿子さんに言われた通り、手紙を書くことにしました。それがこの恋文でした。私は寿子さんに思いを語ってはいませんでした。だからいま精一杯の思いを込めて、シラノのように愛を語ろうと思ったのです。あの入部の申し込みの時からのことを思い出して。しかしそれが何を生み出せるのか。それはもう分かりませんが、せめて何か一言だけでも。そんな思いに駆られてのことでした。

私は千恵子が欲しいと思ったのは事実です。何が智恵子を追い詰めたのか分かりませんが、高村光太郎は智恵子を愛したことだけで芸術家として今も生き残っています。私はシラノになりましょう。世の片隅で、心を壊した人をそっと愛したことの思いを綴りましょう。高村光太郎に離れませんが。

## てがみ

何から話せばいいのか分かりませんが、私はあなたに初めて会った時のことは今でも鮮明に覚えています。大学に入ったばかりで、足が地につかない目まぐるしさの中で、あなたに出会ったことは衝撃でした。ああ素敵だ！ いや、綺麗な人だと言い換えて、私はあなたが私の初恋の人にそっくりなことに気がつきました。ごめんなさい。他の人と比較するようなことを言って。でも、私はその時から密かにあなたを恋しました。しかし、色にでにけり、我が恋は、かもしれませぬ。あなたを抱きしめた時、そう言ってましたものね。そうです。私はあなたの前ではピエロのようでした。歌って踊って、恭しくお辞儀をして、あなたの関心を得ようと、ひたすらあなたを見つめてました。小僧っ子にはそんなことしかできなかつたのです。

（ そうだった。まだ20歳にもならない男は、自分の好きな人を誘いもできなかつた。か  
部の初めてのコンパの時、私は思っきり気取りました。覚えてませんか。他の人たちはごく普通に歌ったり踊ったりしてたけど、私は奇を衒い、敦盛をやってしまいました。敦盛です。

人間五十年  
化天のうちに比ぶれば  
夢幻のごとくなり  
風にはもろき  
露の身と消えにし  
人のためならば  
恨みとは更に思わず

本当に兎戯でした。扇子の代わりに割り箸を持ち、左手を腿に置いてすり足で前に行き、下り、展開しながら謡います。みんなどん引きでした。今思っても身の竦む思いです。そして終わってもシーンとしてる中で一人、前田先輩だけが拍手をして場を持たせてくれました。今も冷や汗が出ます。竹下夢二にでもしておけばよかったと、あとで思いました。私、宵待草は大好きでしたから。でも、敦盛をやって、あなたはあまり関心がなかったみたいでした。残念でした。

それからあなたが部室で本を読んでいたことがありました。覚えていませんか。ロマン

さてロマン・ロランでした。これに私は一つのたくらみがありました。確かにこの本を

ごめんなさい、あの本、水たまりに落として汚してしまいました。で、本屋さんに新し

初めはちょっと怒ってましたよね。それが分かりました。でも早口で捲し立てて説得するものですから、渋々承知してくれて、黙ってデパートの前の本屋まで着いてきてくれました。その本屋の横に大きな花屋さんがあります。ちゃあんと調査済みです。まず本屋に入る振りをして、紙袋に入った本を持って外に出て、あなたに花を買います、どれがいいですか、選んで、というところまでは計画していました。いや花はいいと言い張るあなたに、じゃあ私が選んで買いますと、緋色の薔薇と黄色をもう一輪、白を加えて霞草でデコレートして小さな花束に仕立ててもらって横のカフェにさっさと入っちゃいました。そして種明かしです。まず花束を渡し、袋に入った本を渡します。すいません、本を汚したというのは嘘でした。これはお借りした本で、綺麗なままです。本当はあなたとデートしたくてこんな嘘をつきました。そう言って、ひたすら頭を下げ続けます。しばらくして小さな声であなたはくすくす笑ってくれました。そして、いいですよ、許してあげます。それで、このあと、どうするの?と仰ってくれました。実は、その後のことは考えてませんでした。ですから、後は行き当たりばったりでした。喫茶店でコーヒーを飲み、橋を渡って湖畔へゆき、しばらく景色を楽しんで、よく知らないレストランに入り、夕飯を食べました。私はその間中喋り通しでした。すいません、うるさかったと思います。それと、何を話したのか、いまは覚えていません。静かに一緒に歩いていただけでしたのに。それを嫌な顔もせず聞いていてくれて、私は救われました。きっと、きっと私は思っていました。きっと私があなたを守る、そんな存在になる、そう思っていました。

その日から少しずつ距離が近づき、部室の横でキャッチボールをしたり、たわいもない冗談

それから一年半がすぎました。二年かな? 坂の上の精神病院に入院していると聞きました。

(寿子さんは運動場の向こうで何か球技をやっていて、靴に石でも入ったのか、足を上げて靴を脱ぎ、中を払って履き直して面会室にやってきた。足を上げた時、スカートが捲かれて下の下着が中程まで見えた。男の患者さんもいてもお構いなしの仕草だった。私の中で何かが砕けた。私は、マイヨールの裸体像が裸体であっても品格があるのは、女性が原初として美しいからだと思い込んでいた。)

(雨の肌寒い昼間、傘をさして公園のそばを歩いていると、つい手を伸ばせば届きそうな公園の東屋で、高校生と思われる男女が絡んで座っていた。それも、女の子が男の子の膝の上にまたがり、男の子の肩に捕まって座っているという状態だった。それだけでも目を背けたくなるのに、男の子は女の子の胸元を見つめ、必死に上着のボタンを一つ一つ外している。女の子はあたりを気にして、周りを見回していた。私は急いで目を逸らし、女の子の淫蕩な表情から逃れて足早にその場を離れた。胸苦しく吐き気がして顔が挙げられなかった。)



それから3ヶ月。あなたの突然の訪問がありました。申し訳ない。私はあなたをもうこれ以上失いたくなかった。いや、あなただけではなく、恋を失いたくなかったのです。

(かよ子さん、園子さん、初恋の人、思春期の思い込みの人、その他の・・・辛い恋をさせられた二人など)

たとえそれがけだものの行為であっても、あなたを私のものにできるのならば狂おう！  
そうして、私はあなたを捕まえられたと思いました。あの確証的な行為の果てに。しかし、果たせなかった。あなたの告白で、私は崩壊した。男として、あなたを守れなかった。私はもうあなたを追いかけられなかったのだから。だけど、もう一度来てくれたのなら、私はあなたを離さなかった。

## 返信

返信といっても、すぐには便りはなかった。あの恋文も見方を変えると、別れの便りに見える。恋も昔と読めてしまう。恋なんて掃いて捨てる程あることなのに、恋するものはまるで物語の主人公になったつもりだ。男と女がいればその数だけ物語はある。そして後に返信はきた。一度だけ、名前だけを表書きした年賀状一枚。裏は干支が印刷されたままで、他に何も書かれていなかった。それが何なのか、想像もつかない。これもその年だけだった。私は心が振るえた。沈黙ほど雄弁なものはない。私はあの時、この人を裏切り、捨てた。そんな意識はなくとも、結果的にそうだった。あの人の受け取り方は知らない。だが私はこの人が二人に男に汚されたと聞いて、いま私がしていることもそのけだものたちと同じことだと思ってしまった。ただ私はこの人と確かな繋がりを作ろうと思っていたが、やってることは一緒だ。私もけだものだ。そう気づくと、私は意識がいちどきに萎縮してしまった。そうして私はこの人を救えなかった。そっと抱きしめ、一緒に泣いてやるだけでよかったと、いまなら気がつく。いやわかっていた。だからもう一度出会えば、つぐないはできると思っていた。そして出逢い、踏み出せないまま、すれ違って別れた。この人も私が不幸にしたのかもしれない。誰かは知らないけれど、一緒に暮らしている人がいると聞いた。毎日を穏やかに暮らしてほしい。返信の年賀状を見て、そう思った。

## いまの想い

駄文に成り果てました。私の下らぬ美学と恋物語でした。時間が積み重なって、恋物語もかすんでおりました。

私の初恋の人は、夫がそこにいることを確かめて愛人宅に乗り込み、その人あげるからと宣言して夫を追い出したそうです。あのいじめられて俯くばかりだった少女からは、思いもつかないところです。女性は女神じゃないとはわかっていた筈ですが、どこかへ飛んでいきたくなった出来事でした。

かよ子さんのことは、私の未熟さだったと思っています。ただひたすら私が悪かったとしか

園子さん、あなたは国語の教師になったと聞きました。いい人生を！ \newline  
寿子さん、別れてから、出会うことのなかった人。よく覚えていてくれました。私も忘れち

もう1人の人、もう一度だけ会って、共に過ごせなかった時間を埋める分だけ、抱きしめた

ここには書けなかった二人の人、ひどいことを私に仕掛けた人、そんな人の事は忘れてあげ

---

Yesterday,when I was young

---

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---